

遠隔インタビュー調査のための環境整備とツール選択

小西いずみ（東京大学大学院人文社会系研究科）

1. はじめに：コロナ禍の状況における対人調査

コロナ禍の状況において、フィールドワークによる研究は大きく制限されている。特に、人を相手とする臨地調査は困難で、本稿執筆時において再開できる見通しはない。卒業論文など学位論文の執筆・提出を予定している学生のなかには、研究テーマや研究方法を変更するという選択をした人もいるのではないだろうか。今回の日本方言研究会の研究支援企画においても、対人面接調査を要さない研究テーマや手法・資料が紹介されている。

しかし、すでに計画・進行していた研究テーマを変えず、そのテーマに見合った方法がとれるなら、それに越したことはない。臨地面接調査の代替として、Zoom や Skype などのオンライン会議・通話アプリケーションを用いた遠隔面接調査がある。2020 年 4 月以降、多くの大学ではオンライン授業を実施し、Zoom などのオンライン会議用ツールは、学生・教員になじみのものとなった。企業や官公庁でもそれらを使った遠隔会議が増えており、テレビ番組では、出演者の一部が遠隔出演するだけでなく、オンライン会議用ツールの表示画面をそのまま放映しているように見えるものもある。

このようにオンライン会議・通話が一般化した今は、特にインフォーマント（コンサルタント、当該方言話者として研究に協力してくれる人）が中年層以下であれば、相手への負担もほとんどなくオンライン調査が可能な場合もあろう。高年層でも、離れて住む家族などとの間でそうしたツールを利用した経験のある人が増えている。また、本人に利用経験がなくても家族や近親者の協力を得て実施できることもある¹。コロナ禍がいつ終息するか分からない今、遠隔でのインタビュー調査は有効な臨地調査の代替手段となる。

ただし、そもそも調査は相手にとって迷惑な行為であり、それが可能になるのはインフォーマントや他の協力者の厚意による。遠隔調査によってインフォーマントに金銭的負担をかけてはならず、労力もできる限り軽減せねばならない。その上で方法や時間、データの管理・公開のしかた、謝礼の有無などについて説明し、同意を得ねばならない。インフォーマントの ICT 環境、他の協力者の有無、調査者とインフォーマントとの関係等によって、調査者が最善と考える以外の方法によらざるを得ないこともある。

本稿ではこうした認識に立った上で、遠隔調査実施のための環境整備やツール選択の参考となるかもしれない情報を提供する。内容・構成は次のとおりである。

オンライン調査体験記（2 節）

遠隔調査で得られる音声データの比較（3 節）

¹ 横山晶子氏（東京外国語大学、日本学術振興会）は早くから Skype を用いた調査を実践してきた研究者の一人である。横山氏自身のライフイベントや居住地により臨地調査が難しい時期に、以前からのインフォーマントが同郷者との交流のために Skype に興味を抱いていたことが分かり、氏がインフォーマントの環境整備を行って Skype での調査が可能になったという。インフォーマントの利益にもつながった、好ましい事例と言えよう。

オンライン調査に応じられる日琉方言話者の紹介（4節）

2. オンライン調査体験記

2020年7月下旬、山梨県奈良田方言話者をインフォーマントとする、Zoomを用いたオンライン面接調査を行った。筆者にとっての初めてのオンライン調査である。

インフォーマントは調査時86歳の男性、Mさんである。筆者は2017年以来、奈良田での臨地調査を共同研究者とともに継続して行っており²、Mさんはもっともお世話になっている一人である。7月中旬、臨地調査再開のめどがつかないことから、思い切ってMさんにお電話し、遠隔調査の実施可能性について相談した。Mさんはコンピュータやスマートフォンを使わないと記憶していたため、私が提案したのは「必要な機器（WiFi機能付のタブレット端末）をご自宅に送り、電話で操作を説明する」という内容であった。Mさんは「遠隔で調査を行うのは構わない」とおっしゃってくださり、さらに「近所のUさんはパソコンを持っていて仕事でもよく使うようだから、Uさんに頼んでUさん宅で行うのがいいのではないかと提案してくださった。Uさんは数年前から奈良田で暮らしておられる若いご家族で、私も面識があった。電話でUさんに事情をご説明してお願いしたところ、快くお引き受けくださった。Zoomは仕事で使ったことがあり、基本的な使い方は分かるとのことだったので、Zoomを用いることにした。また、Uさん宅にはWiFiがあり、特別な通信費がかからないことも確認した。その後Uさんとは電子メールで、Mさんとは電話で連絡し、日程を調整した。Mさんとの対面調査では、休憩や雑談をはさみながら短くて2時間、長い時には3時間を越すこともあったが、今回ははじめてのオンラインでお疲れになることを想定して90分とした（しかし結局2時間行った。後述）。Uさんには予め電子メールで、ミーティングの招待情報（URL、会議ID、パスワード）を送っておいた。ミーティングの設定では、「待機室を有効化」のチェックは外し、「ホストより前の参加を有効にする」にチェックをしておいた。

開始予定時刻の約10分前にZoomの当該ミーティングに「入室」したところ、すでにUさんは入室していて（カメラ前には不在）大変恐縮した。しばらくしてMさんが来て、Uさんの案内でカメラ前に着席された。すでに画面には私が映っており、着席される前後にマイク通じて挨拶をしたので、Mさんも違和感なくビデオ通話を始められたのではないかと思う。Uさんやご家族は調査中、別室で仕事や家事をすとおっしゃり、部屋を空けてくださった。

まず、Mさんに見え方や聞こえ方に問題がないことを確認し、録音・録画の承諾を得た³。録音・録画はZoomのレコーディング機能を用いた。調査項目は文法（主に格）と親族語彙で、共通語の語句や文を提示して奈良田のことばに訳してもらった翻訳式質問の形式である。対面調査では、紙かタブレット端末で共通語の文や語のリストを示しながら奈良田方言に

² 国立国語研究所研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、およびJSPS科研費JP17K02777, 19H01255, 20H00015の助成を受けている。

³ 注2のプロジェクト開始時に録音・録画とデータ公開形態については説明し、書面で同意を得ており、あわせて調査のたびに了承を得ている。今回の調査も同様である。なお、本節に記す内容や図1の掲載についてもMさん・Uさんの許可を得ている。

訳していただくが、Zoom ではそれを「画面共有」の機能を使って行うことができた (図 1)。

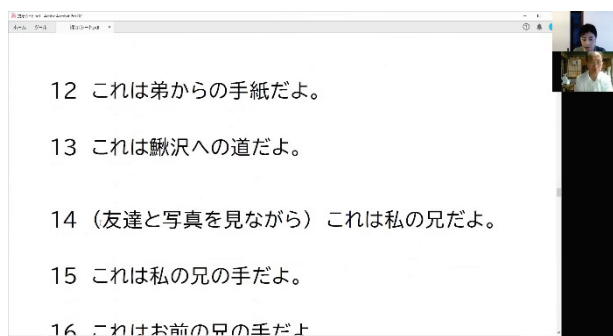


図 1. Zoom で画面共有しながらのインタビュー調査のようす

Mさんに特に疲れたご様子もなかったので、対面での際と同様に約 1 時間たったところで休憩し、さらに続けた。予定の 90 分がたったが、準備していた項目が少し残っており、Mさん・Uさんともに続けて構わないとおっしゃってくださったので、結局 2 時間行った。質問を終えたところでMさんがUさん呼び、相互に挨拶して終了した。終了前にMさんに感想をうかがったところ、「操作は全てUさんが行ったので問題なく、ビデオ通話にも違和感はなかった。対面に比べて若干目が疲れやすいかもしれないが、2 時間ぐらいならさしつかえない」とのことだった。

Zoom のレコーディング機能では、音声付き動画と音声のみのファイルがともに MPEG-4 形式で保存される。この方式で記録された音声データは非可逆的な圧縮を伴うので音響分析には適さないが、今回の記録を確認してみると、ノイズキャンセリング機能がうまく働いており、語彙や文法形式の聞き取りには支障なかった。サンプルを私のウェブサイト⁴に置く。

このように、私のはじめてのオンライン方言調査は、Mさんに加えUさんのご協力を得るという幸運により実現した。Mさん・Uさんともに、次回以降も日程さえ合えば同様に行って構わないとおっしゃってくださり、感謝に堪えない。この夏には、共同研究者の尽力で、他地域でのオンライン調査も予定しているが、やはりこの地域でもインフォーマントが ICT 機器に不慣れなため、当地の教育委員会の協力を得て実施することになっている。

インフォーマントが調査者の家族の場合などは、機器・ソフトウェアの導入の段階から遠隔でやりとりして調査に至ることも可能かもしれないが、そのようなケースは多くはないだろうし、親しい間柄であってもトラブルになりかねない。感染拡大に影響を与える心配のない地理的範囲で、インフォーマント側の環境の整備・提供に協力してくれる人を探すのは、現実的な選択肢の一つであろう。その場合も、インフォーマントや協力者に過度な負担とならないように配慮する必要がある。

3. 遠隔調査で得られる音声データの比較

⁴ <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/remotesp/remotesp.html> の narada_okkanai.m4a

前述のように、インフォーマントの ICT 環境は調査者が望むとおりにはならない。そのことを前提として、研究目的に適うデータを得ることに努めたほうがよい。ここでは、その検討・選択の参考となるよう、さまざまな環境・手段で記録した音声データを示し、比較する。

用いたハードウェア・ソフトウェアは次のとおりである。音声は筆者のウェブサイトにある⁵。使用機器の詳細についてもウェブサイトを参照されたい。

発話者の使用機器 / 収録者の使用機器

- a. Zoom ミーティング（記録：Zoom レコーディング機能）
 - a1. デスクトップ型 PC、USB マイク / ノート型 PC
 - a2. ノート型 PC、内蔵マイク / デスクトップ型 PC
 - a3. タブレット端末(iPad)、内蔵マイク / ノート型 PC
 - a4. スマートフォン(Android)、内蔵マイク / ノート型 PC
- b. Skype ビデオ通話（記録：Skype レコーディング機能）
 - b1. デスクトップ型 PC、USB マイク / ノート型 PC
 - b2. ノート型 PC、内蔵マイク / デスクトップ型 PC
 - b3. タブレット端末(iPad)、内蔵マイク / ノート型 PC
 - b4. スマートフォン(Android)、内蔵マイク / ノート型 PC
- c. LINE ビデオ通話（記録：Windows10 標準搭載 動画キャプチャ）
 - c1. スマートフォン(iPhone)、内蔵マイク / ノート型 PC
- d. 電話回線による通話（記録：通話録音アプリケーション「Idea 通話レコーダー」）
 - d1. スマートフォン(iPhone)、内蔵マイク / スマートフォン(Android)、

さらに、上のいくつかでは、網羅的ではないが、発話者の環境として、周囲に音を発する物がない場合、エアコンと扇風機が付いている場合、エアコンと扇風機とテレビが付いている場合を区別している。調査の際、テレビについては消すようお願いできるだろうが、エアコン・扇風機などはそういうわけにはいかず、遠隔では位置の調整もしにくいだろう。この程度の生活音の存在は想定しておいたほうがよい。

発話は、地域方言による例文とした。以下のとおりである。特にこれらの方言に馴染みのないかたは、以下を見ずに聞き取れるかどうか試してみてもよいだろう。

- a, b: 富山市方言 (筆者)「ゴゴカラ アメ フルト」「ナラ イマノウチ カイモン イカンマイケ (一部、イッテコンマイケ)」
- c, d: 松山市方言 (K氏)「ゴゴカラ アメ フルッテ」「ホンナラ イマノウチニ カイモノ イコーヤ」

※ いずれも「午後から雨が降るって (伝聞)」「じゃあ今のうちに買い物に行こう (行ってこよう) (勧誘)」の意

⁵ 注4と同じ: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/remotesp/remotesp.html>

a~d 全てが、通信を経る上に非可逆的な圧縮を伴う MPEG 形式で記録されるので、音響音声学的な分析には適さない。しかし記録されたものを聞くと、全ての使用機器・環境において語彙や文法形式の聞き取りには支障ない音声を得られた。

a. Zoom ミーティング

聴覚的には音質の序列は、 $a1 > a2 = a3 > a4$ といったところだろうか。a4 (スマートフォン) はかなり音質が低下するが、聞き取りはできる。使用機器によらず、特に発話開始部は「きつく」「尖って」聞こえるが⁶、多少耳障りな程度で、言語形式の聞き取りには問題がない。ただし、ここで聞き取りができるというのは、すでによく知っている (音韻体系や主要な文法形式が分かっている) 言語変種が対象の場合であり、よく知らない言語変種や未知の語形の場合は、特に a4 において聞き取りにくいこともありそうだ。

また、a1 の発話では途中で音声歪み、a2 の一つでは発話開始直後の音声が極端に小さい。入力から通信、記録に至るまでのどの段階で起こったのか分からず、また、a1 や a2 の環境で起こりやすいのか偶然これらの発話で起こったのかも判断できない。

以上の点を考慮すると、注目する言語形式については、対面調査時以上に、複数回発話してもらい、調査者が発話して正しい形か判定してもらいなど、気を付けたほうがよさそうだ。

発話者の周囲の音環境別に聞き比べると、エアコンの音は聞き取れないが、扇風機の風の雑音は目立つ。特に未知の語形の聞き取りに支障があるかもしれない。テレビの音は聞き取りに支障があるほどではないが、不自然な音に変質しており、煩わしく感じられる。

b. Skype ビデオ通話

筆者の聴覚印象では音質の良さは a と似て $b1 > b2 = b3 > b4$ という順だと感じられる。b4 の一部は「午後」の [ŋ] が無音になったり、「イカンマイ」の [m] が不自然に延伸したりしている⁷。Zoom に比べて Skype で音量がさまざまなのは、Zoom において「自動で音量を調整」と設定したためだと思われる。また、今回のデータでは発話開始時の音の「きつき」は Skype のほうが Zoom より顕著である。一方、Skype では使用機器 1 や 2 の場合に Zoom で見られたような音声のゆがみがなかったが、両者の差が偶然の偏りか、判断できない。

発話者側の周囲の音については Zoom の場合と似ているが、Skype のほうがテレビの音声をあまり拾っていない。

c. LINE ビデオ通話 (記録: Windows10 標準搭載 動画キャプチャ)

音量が小さいという問題があるが、その点を除くと聞き取りには問題がない。音量が小さいのは LINE ではなく、収録に使ったノート型 PC の入力レベル設定の問題であろう。ステレオミキサーの入力レベルを「55」としていたが、これでは小さすぎるようである。入力レベルについては事前によく確認したほうがよさそうだ。

⁶ 波形を見ると、発話開始時に急激に振幅が大きくなっており、それが「きつい」という聴覚印象につながっているか。録音機を用いて MP3 形式で録音した音声 (これも筆者ウェブサイトに参加として掲載) ではそのようなことはなく、MPEG での音声圧縮に常に伴うわけではなさそうである。筆者に音響音声学、音声圧縮、音声通信技術の知識がなく、これ以上のことは不明である。

⁷ これも偶然かもしれないが、a の場合も含めて問題のある音は鼻音に偏っている。

d. 電話回線による通話（記録：通話録音アプリケーション「Idea 通話レコーダー」）

聞き取りには問題ない音質である。サンプルでは発話者（収録機における受話音声）の音声のみ切り取っているが、送話音声も同等の入力レベルで記録されており、会話を聞き取るのにも支障ない。今回は「Idea 通話レコーダー」という無料のソフトを使ったが、同様の機能を持つものは多数ある。複数試してみるとよいだろう。

なお、「Idea 通話レコーダー」では、通話開始前に録音するかどうかの設定をする必要がある（通話開始後に設定すると動作が不安定になり、録音に失敗した）。調査の際には、いったん録音の許可を得てから、録音の設定をして電話をかけ直すなどの手順が必要となる。

4. オンライン調査に応じられる日琉方言話者の紹介

2節では筆者のオンライン調査の経験を紹介したが、そこでも述べたように、この調査は、すでに数年かけて関係を築いていた上に、オンライン調査を可能にする環境を提供してくださる協力者にも恵まれるという幸運により成り立ったことである。特に新しく地域やテーマを設定して研究を始めるときなど、オンライン調査に応じられる話者を見つけるのは難しい場合も多いと思われる。

そのような場合の一助となるよう、筆者および下地理則（九州大学）、平子達也（南山大学）は、2020年4月より、オンライン調査に応じられる日琉方言話者の紹介を行っている。詳細は、筆者のウェブサイト中の「オンライン調査対応 日琉方言話者紹介」のページを参照されたい⁸。本稿執筆時点で25名の話者が登録されている。対象となる方言や話者属性は限られているが、研究テーマ・目的に合うならぜひ利用していただきたい。

協力してくれる話者も引き続き募集している。同ページのメールアドレス宛に連絡していただきたい。

5. おわりに

繰り返しになるが、調査は本来的に地域社会にとって迷惑な行為であり、インフォーマントや協力者の厚意によって成立するものである。ましてやコロナ禍の状況での臨地調査の実施は、生命・健康上の危害を与えることにもなりかねない。医学的・社会的状況だけでなく、インフォーマントや周囲の人の心情にも配慮した慎重さが求められる。本稿では、臨地調査の代替手段として、遠隔インタビュー調査についていくつかの情報を示したが、その実施においても、インフォーマントや協力者の負担を考慮した上で、研究テーマ・目的に見合う手段を選択する必要がある。また、選択した機器・アプリケーションの性質をふまえ、記録やデータ管理について予め説明し、同意を得ねばならない。こうした基本的手続きを経ることでインフォーマント・協力者との関係を築いて調査を行い、のちに成果を報告することで厚意に報いたいものである。この点は臨地調査も遠隔調査も同様である。

（原稿提出日 2020年8月11日）

⁸ <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/dialectspkrs/dialectspkrs.html>